

国際ワークショップ

“Religion and Society in Central Eurasia:
New Sources for the Religious History of Kazakhstan”
に参加して

宇山 智彦

カザフスタン研究は欧米ではウズベキスタン研究に圧倒されており、カザフスタン史に特化した国際会議がカザフスタン以外で開かれる機会は極めて珍しい。カザフスタン史と宗教に関するワークショップが2009年10月29～30日に古都ヴェネツィアで開かれるから来てほしいという誘いをニコロ・ピアンチオラ氏から受けて、私は躊躇なく参加を決めた。

ワークショップの主催機関はヴィチェンツァの社会宗教史研究所 (Istituto per le Ricerche di Storia Sociale e Religiosa)、事実上の組織者はトレント大学のピアンチオラ氏だが、会場はサンジョルジョ・マッジョーレ島にあるチニ財団であった。観光客の喧噪に包まれたヴェネツィア本島から少し離れた小島に立つ昔の修道院の建物で、絵画や彫像に囲まれながら遠いカザフ草原の歴史を議論するのは、二重の意味で非日常性を感じさせる不思議な経験であった。

配布されたプログラムでは15の報告が予定されていたが、2人が直前にキャンセルしたため、本稿の末尾に掲げる13の報告が行われた。各報告の概要は以下の通り（考古学のボノラ報告と、タタールに関するカディオ報告は全体のテーマからやや外れていたため省略）。

最初の報告者であるアブセイトヴァ氏は、私を含む日本の多くの研究者がお世話になり、今回のワークショップのカザフスタン側参加者の取りまとめ役でもある東洋学研究所の所長である。彼女の報告は、研究所が集めた資料の紹介が中心で、特に古代以来の中央アジアのコイン、絵、天幕などに現れた宗教的な意匠がヴィジュアルな形で示された。また、同郷の偉人であるイスラーム知識人、マシュフル・ジュシブ・コペエフ（1858-1931）が持っていたとされる予知能力や、彼の廟への巡礼の様子が熱く語られたのが印象的だった。

デウィース報告では、カザフ草原のイスラーム化にスーフィズム、特にヤサヴィーヤの影響が大きかったとする通念には根拠が薄いという、重要な指摘がなされた。墓廟の伝統とスーフィー伝統は異なるものであり、カザフスタンで強いのは前者だということである。そして、

キプチャク草原出身でヤサヴィーの弟子・孫弟子などになった人々は確かにいるが、その後どこで過ごしたのか（故郷に戻ったのか）は不明だとしうえで、何人かの人物を紹介した。その一人のバクシャエシュについて、フロアからムミノフ氏が、彼の子孫は作家ムフタル・アウエゾフ（1897-1961）を始めカザフスタン各地に多いと指摘したことも有益であった。

フランク報告は、前述のマシュフル・ジュシブの生涯と著作を通して、カザフ人のイスラーム実践や、スーフィー・学者のネットワークを分析するものであった。タタール人の研究を長く行ってきた報告者の立場を反映して、カザフとタタールの類似性の指摘（つまり、カザフ遊牧民はタタールと違ってイスラーム的ではなかったという通念への反論）に重点が置かれた。またマシュフル・ジュシブの著作に現れるイシャーンは皆ナクシュバンディーであること、ロシア支配下で政治エリートとして台頭した非チンギス裔が、イスラームのパトロンとしても重要な役割を果たしたことが指摘された。

ムミノフ、モツラカナガトウル両氏の報告は、カザフのイスラームを論じる際に、世俗的な見方やタタール・ウズベクからの見方だけに依拠するのではなく、カザフ人ウラマーに注目する必要性を強調し、中央アジア・カザフスタン・ムスリム宗務局のもとでカザフスタンのカーディーを務めたサドワカス・グルマニー（1890-1972）と、彼の手稿に登場する19～20世紀のウラマーを取り上げた。帝政期・ソヴェト期にまたがるウラマー迫害の歴史が、豊富な伝記的データによって示されたほか、ロシア帝国がダール・アル・イスラームなのかダール・アル・ハルブなのかについての論争がカザフ人ウラマーの間でもあったこと、グルマニーがジャディードを嫌うカディームであったことなどの興味深い事実が明かされた。

ワース報告は、ロシア帝国の宗教管理の歴史の中で、カザフ人が1868年の臨時統治規程により宗務協議会の管轄から外されたのは例外的だとしうえで、1888年にバイカル以西のブリヤート人仏教徒が東シベリアの仏教宗務機関の管轄から外されたことを類例として挙げた。外部（カザフに対するタタール、ブリヤートに対するモンゴル）からのネガティブな宗教的影響を防ぐという意図は2つのケースに共通するが、政府がカザフ人を一体の政策の対象としたのに対し、ブリヤートについては仏教化の程度の異なるバイカル以東と以西を区別する政策を行ったという。フロアからは、途中から外されたわけではないにしても宗務機関の管轄外に置かれたのはトルキスタンも同じだとして、「例外」との認識に異論が出された。

宇山報告は、カザフ史研究の中でイスラーム史と知識人史が切り離されていること、知識人の歴大な著作が十分活用されていないことを指摘し、特に詩の史的価値を強調した。具体的には、①19世紀の「ザル・ザマン」詩人たちがロシアへの怒りをイスラームの観念と遊牧国家への郷愁の両面から表現したこと、②19世紀末には反ロシア的傾向が弱まると共に無知なムッラーやスーフイズムへの批判が強まること、③世俗知識人とイスラーム知識人の対立が強調されがちだが、テュルク語／カザフ語によって知識を広める姿勢は両者に共通

していたこと、④ドゥラトフの『めざめよ、カザフ！』（1910）が広めた「眠りからの覚醒」の思想も両種の知識人に共有されるもので、アクモラ（1831/39-1895）の詩や、*Naṣīhat-i qazāqīya* と題される諸作品（著者はさまざま）に系譜をたどれること、などを論じた。

サルトリ報告は、カザフ人はシャリーアを用いなかったという通説に挑戦する報告であった。ロシア帝政期トルキスタンの統治規程では、遊牧民はビー法廷、定住民はカーディー法廷の管轄に分けられたが、タシケント近郊のカザフ人の場合、遊牧民の家畜泥棒の案件がカーディー法廷で扱われたり、ビー法定の審理がシャリーアに依拠したりすることがあった（シャリーアの方が被告の地位をよく保障できたため）。また、遊牧民は土地所有権がないことになっていたが、実際はシャリーア法廷で土地を売買することがあったという。極めて興味深い報告だが、イスラーム都市の周辺にカザフ人が住むという特殊性を持つタシケント近郊以外の地域に一般化できる話かどうかは、疑問であった。

ピアンチオラ報告は、農業集団化に抵抗したソザク反乱（1930年）に関する尋問記録を分析するものであった。聖戦の呼びかけや、アフガン人やコーカンド出身のイシャーンの関与など、反乱にはイスラーム的な要素が少なからず見られた。スルタンベク・ショラコフという人物がハンに選出されて反乱を率いたというのが通説だが、ピアンチオラ氏によれば、彼には宗教的・部族的な権威がなかったという。

アフアナシエヴァ報告は、カザフ人の衛生状態や、その宗教との関係についてのロシア人医師の観察を取り上げた。ロシア人医師らによれば、カザフ人は飲酒をしないのでロシア人より健康的だが、汚れや不潔な習慣により病気が多かった。医師らは、イスラームに関して否定的な評価をしなかった一方、バクス（シャマン）については、神経症などの治癒を評価する場合もあったが、危険性を指摘する声が多かったという。

ヴォルコヴァ報告は、1905年の宗教寛容令以降にアクモラ州でヨーロッパ・ロシア方面出身の移民（農民）から出された改宗申請を分析した。以前からロシア正教以外の宗教・宗派を信じていたが公に表明できなかった場合（特に古儀式派）、強制的に正教化された人々が元の信仰に戻る例（帝国西縁出身のルター派、カトリック）、宗教的信念や結婚によりイスラームなどに改宗する例（移民村では他宗教信徒との接触が多い）、などが挙げられた。正教会はプロテスタントの進出を問題視したが、正教聖職者の腐敗と無力のため有効な対策をとれなかったこと、改宗の許可・不許可の基準が複雑かつ曖昧であったことも指摘された。

マリコフ報告は、カザフ人に対する正教宣教の失敗について、イスラームが既に浸透していたことやロシア当局が現状維持を望んだことなどがこれまで理由として挙げられてきたが、主因は、改宗しても経済的利益がなかったことだと主張した。私も近いテーマを研究したことがあるが、マリコフ氏の主張には説得力を感じることはできなかった。カザフ人は非ムスリム・半ムスリムだという氏のナイーヴな発言に、フロアから批判が相次いだ。もっと

も、カザフ人のイスラーム性を強調する研究が急激に増えていることに対する違和感の表明としては、全く理解できないわけではないのだが。

ワークショップは全体としてテーマ的なまとまりがよく、比較的少人数の参加者の間で充実した議論がなされ、カザフスタン研究の豊かな可能性を示していた。フロアからは、トルキスタン市でカザフ人のイスラーム実践を調査したことで知られる人類学者プリヴラツキー氏や、ベテランのソ連史研究者であるグラツィオージ氏も盛んに発言した。報告者の中では、サルトリ氏やピアンチオラ氏など、ヨーロッパ人の若手研究者の元気がよいのが印象的だった。近年、伝統的に中央アジア研究者が多いフランスや、イスラーム研究が強いドイツのほか、イタリアやイギリスからも優れた研究者が現れ、アメリカ人研究者がやや勢いを失っているのを補っている感がある。人数的に決して少なくなく、国内蔵書や現地調査などの研究条件に恵まれた日本人研究者も、さらに頑張らなければという感を新たにした。

ただしやや気になったのは、報告がイスラーム史的アプローチとロシア史のアプローチに二極分化していることであった。遊牧民地域の現地史料が少ない状況の中で、ロシア語アルヒーフ史料とイスラーム史料の活用が盛んになっていることが背景にあるのだろうが、これではまとまりのあるカザフスタン史像を描きにくい。特に史料が豊富な20世紀については、カザフ人自身が書いた史料を幅広く活用し、テーマ的にも偏らない研究を進める必要があるだろう。

(北海道大学スラブ研究センター)

PROGRAM

29 October 2009

Meruert ABUSEITOVA (Institute of Oriental Studies, Kazakhstan)

“The Research of the Institute of Oriental Studies about the Religious History of Kazakhstan”
(in Russian)

Devin DEWEESE (Indiana University, USA)

“The Yasavī Presence in the Dasht-i Qipchaq during the 16th and 17th Centuries” (in English)

Allen J. FRANK (Independent scholar, USA)

“Māshhūr-Zhūsip Köpey-uli as a Source on Sufis and Scholars in the Kazakh Middle Horde” (in English)

Ashirbek MUMINOV and Saypulla MOLLAQANAGHATULI (Institute of Oriental Studies,

Kazakhstan)

“A Biographical Dictionary of Kazakh *Ulamā*’ (19th–20th Centuries)” (in Russian and Kazakh)

Gian Luca BONORA (University of Bologna, Italy)

“Funerary Practices in the Syr Darya Delta between the Late Bronze and the Early Iron Age” (in Italian)

30 October 2009

Paul WERTH (University of Nevada, USA)

“The Kazakh Steppe and Islamic Administrative Exceptionalism” (in English)

UYAMA Tomohiko (Hokkaido University, Japan)

“Changing Religious Orientation among Kazakh Intellectuals in the Tsarist Period: Between *Sharī’a*, Secularism and Philosophical Search” (in English)

Paolo SARTORI (Martin Luther Universität Halle-Wittenberg, Germany)

“«Swearing in God’s Name»: On Oath-Taking and the Application of *Sharī’a* among the Sir-Darya Kazakhs (1914–19)” (in English)

Niccolò PIANCIOLA (University of Trento, Italy)

“OGPU Documents about the Kazakh Anti-Collectivization Revolts (1930–1931): Religion as a Police Category” (in English)

Anna AFANASYEVA (Yaroslavl State Pedagogical University, Russia)

“Russian Doctors’ Writings as a Source on Kazakh Religious Beliefs (19th Century)” (in English)

Tamara VOLKOVA (Kazakh-German University, Kazakhstan)

“The Causes of the Transformation of Confessional Identity of Peasant Settlers (End of the 19th–Beginning of the 20th Centuries)” (in Russian)

Yuriy MALIKOV (State University of New York, USA)

“The Lost Battle for the Souls of Nomads: Russian Orthodox Christian Missions in the Kazakh Steppe in the 19th Century” (in English)

Juliette CADIOT (EHESS, France)

“Searching for Soviet Religious Policy in Provincial Archives” (in English)